

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十九年十一月十五日
第三種郵便物認可
発行（毎月一回・十五日発行）

（通第四二四号）

慈光

第三十六卷 第十二号

目次

阿闍世王の懺悔	近角常観	(1)
“ただ念仏して”たのもしさ(四)	池山榮吉	(8)
香月院語録		(12)
無相法語	岩崎成章	(14)
念仏者木村無相先生	土井紀明	(17)
法喜その折りく	花田正夫	(21)

阿闍世王の懺悔

近 角 常 観

彼のアジャセ太子は、国王となつて飽くまで五欲の樂をほしいままにしようと思つ心から、父を殺して王位についた。然し後に至つて、心に深い後悔を為し、胸中しきりに熱し惱んで、全身に悪瘡を生じ、臭氣甚だしく近づくことが出来ぬ。王自ら謂えらく、此の如く悪事の報がてきめんであるから、唯今にも地獄に墮ちるであらうと、大いに苦しむに至つた。父を殺す程の者であるが、さすがにビンバシヤラ王の子であるから、父の御蔭で、自然と仏陀の御手廻わしで、かゝる心が起つたのであらう。いよ／＼目が醒めてみると堪えられない。夜となく昼となく苦しむ。母のイダイケ夫人は、見かねて種々薬をつけてやるが、薬を塗れば塗るほど、いよ／＼痛みが増すばかりで少しも効がない。そこでアジャセ王が、母上に申すには「これは私の心から起つた病であります。肉体だけの尋常の病とは違います。それゆゑ、とても人間の手ではなれるものではない。かゝる身も心もまい」と、如何にも失望悲哀の頂点である。かく身も心も

①

悩乱して現在未来の苦痛煩悶が、一時に大山の崩れる様に迫っている時、六人の臣下が次から次へ伺候した。これは印度の六派哲学を奉ずる人達で次のように申し上げた。先ず第一が日月称と云う人で、この人が王の御前に出て「大王、何故そのように萎れてましますか。御身体のお痛みでありますか、お心のお痛みでありますか」大王答えて「余は今身心共に痛まずには居られぬ。我父何の罪もないのに、無法にも逆害を加え奉つたことは、実に申訳がない。智者より此の如く聞いて居る。世の中に五人のものがあつた。此者は地獄を遁れられぬ。それは五逆の罪人であるということである。余は今天地も容れぬ大罪を犯した。如何して身心共に痛まざるを得んや。如何なる名医もこの苦しみを治してくれる者はあるまい」と云われた。日月称の申上げるやう「大王よ、何もそのように御心配なさるには及びますまい。くよ／＼と御心配遊すから、いよ／＼心配になるのであります。眠れば眠るほど、どれだけでも眠たいやうな

ものであります。大王は、五逆罪を造つた者は、墮獄するとの仰せであります。誰が實地に往つて見て来て申したのであります。世間には利発な者があつて、今の仰せの如く地獄があるなどと、見て来たかのように説きます。

②

また大王は、世間に御病氣をいやす者がないと仰せられました。此処に至極の名医フランナと申す人がいられます。この人は一切何事も知らぬこととはなく、其德行も、實に一点の汚れの無い方で、常に一切の人の為に、無上の教を垂れて下さいます。この人の説では、善と云い悪と云う如きことはあるものでない。故に善悪の応報などがある筈はない。従つて人の行為にも勝れた行、劣つた行と云う區別を立てるものでない。一切の事は皆空無であると教えられます。この人は唯今王舎城の市中に住して居ります。願くば大王、兎も角もお出かけ遊ばして、此人に治療をお命じなさるやうにと。そこで大王は「実に汝の言う如く余が罪を滅ぼしてくれるならば、余も深く帰依することであらう」と言つて、御挨拶をされました。

この日月称大臣の言うところは、心配するから益々心配になるので、そんなに心配せずに置けと云うのであるが、かく忠告したとて、何の効があらうか。深く我心に悪しきことを知つて、心配で／＼ならぬ時に、かくの如きことを云つても、少しも慰めにはならぬ。心配せずに置かれるも

③

のなら誰が好んで心配するであらう。せずに居ようと思つても、心配せずに居られぬゆゑ心配するのである。之を察せずに、心配せずに置けといふは、何という情の無い言葉であるか。けれども世間には此の如き慰め方をするものが随分多い。さてこの日月称といふは、空見外道とて、過去世もなく、未来世も無し、唯命のある間こそ生きて居ると云うのであるけれども、死ねば大風に灰をまいたやうなもので、二度と生れて来るものでないと説くのである。自然前述のやうなことを云つて慰めようとしたのである。今日とても、此種の意見を持つて、宗教に対する者も少なくない。一時評判の高かつた彼の中江兆民氏の「無神無靈魂論」もこれと似ている。又是の反対で黒岩氏の「天人論」、これも一時は余程評判のものであつたが、これは或る意味に於て靈魂の存在を主張する。然したといふ靈魂があると道理の上できめたからとて、それで人間が實際安心出来るものでもない。又靈魂が無いと云うたからとて、罪悪の感じが深くなつて苦痛に沈むものを慰め得るものでもない。つまり学問や理屈でどう押附けて見ても、それで生老病死憂悲苦悩を抱いている人間に満足を与えられるものでもない。眞の安心は實際の宗教より外に達し得られる道はない。

次に一人の臣下蔵徳がお伺いして、「王、何でその様におやつれ遊ばすか、お啓もおかわきの塩梅、音声も細つて

破るという義がありますから、親を殺す者は地獄に落ちると申しますが、既に地獄という言葉が地獄が破れて仕舞うということになるではありません。それならば罪も報もありませぬ。又地という文字には人間という訓があり、獄と云う字には天と云う訓があります。して見ると、父を殺すと人間もしくは天上界に生れると云うことにでもなりませぬか。そこでバソ仙人の説には、羊を殺すと人間もしくは天上界の業を受ける、その事を地獄と云うと申して居ります。又地の字には命と云う訓があり、獄の字には長いと云う訓があります。して見ると、人を殺すと自分が長命することでありませぬ。このように文字の訓義を調べて見ますと、どうしても恐ろしい地獄世界などと名付る場所はありません。譬えば丁度麦を種えると麦が生え、稲を蒔くと稲が取れるようなもので、人を殺すと還つて人に生れますが、地獄に墮ちるなどの心配はいらぬことであります。大王先ず私の説をお聞き下さい。実は殺すの殺されるのと云うことは決してない訳であります。何故なればもし仮りに人間に魂があるともしも人殺しは罪になりませぬ。魂が実にあれば、それは死なぬものでしょう、死なぬものならば殺そうとしても殺しようがないではありませんか、何処に罪と云わるべき訳がありません。又魂が無いならば草木や石瓦の様なもので、殺したくても殺すべきものが無い

ではありませんか。どうして罪となりませぬ。どちらから考えても人殺しが罪となると云う道理は立ちませぬ。譬えば火が木を焼いても火に何の罪もありません。斧が木を切つても斧に罪があると申されませぬ。一切万物皆この通りで殺すものも殺されるものも無い。どうか大王御心配をおやめ下さる様に願います。物を気にしては果てしがありません、唯心配が募るばかりであります。こういう道理を充分に説き明かす智者はカラクダカセンエンと云う人でありませぬ。何卒その人に就いて早く御安心遊ばすように」と。

第六番目に無所畏と云う人が出て、是も自分の意見を述べて、矢張り自分の師とするニケンダニヤケンシと云う人を推挙しました。かように六人の臣下が御前に出て、各自の意見を述べてお慰めしましたが、大王は一向に安心の様子はありませんでした。

然るところへ彼の有名なギバ大臣がお伺いして、色々と慰めて、遂に仏教に帰して真実の安心を得られました。ギバ大臣は先ず優しい親切な言葉を以てお尋ね申すよう「大王、如何です、お眠りになれますか」と。これに答えて王の云われるには「ギバよ、余は今まことに重病である。正法の王に悪心を以て暴逆を加え奉つたから、これはどんな良薬でも御祈禱でも、どんな看護人があつてもとても癒るものでない。余は以前に智者の教に聞いたことがある。身

愧

も意も口も、これが清浄でないならば、この人は必ず地獄より外に行き場がないと思えと。余は正しくそれである。どうして安穩に眠ることが出来ようか。今余の為に無上の医者が無い。何とかして余の病を治す良い薬はあるまいか。この苦しみを救うてくれる道はないだろうか」と。如何にも法を求める真心が言葉の上に溢れている。ギバ大臣は腹一杯の同情を以て王を諷めて「それは如何にも結構なお心であります。大王は罪をお造りになつても、御心に深く後悔されて慚愧なされてはいます。大王諸仏の常の御教化には、二つの善きことがあつて能く衆生を救う。先ず一には慚、二には愧である。どちらも『ハチ』と云う字ですが、慚は自分で罪を造らぬこと、愧は他に罪を造らせぬこと。又慚とは自分の心に恥じること、慚は打明けて他に訴えること。又慚とは他の手前を思うて慎むこと、愧とは神仏の冥見に恐れ入ること。この慚愧の念の無いものは人とは云われぬ、畜生であります。慚愧の心があるので能く父母や師匠、その他目上の人を尊び敬うのである。慚愧の心があるので父母の恩も分かり、兄弟の親しみも心に浸み渡るのである。今大王は心から慚愧していられる、実に結構なことでございますが、如何にも仰せの通り、其病を治すものは外にはありません。唯カピラ城の浄飯王の子シツタ太子は、別に師匠とはなく独りでお悟りなされて、無上菩提

を得られた仏陀であり、世界中にならびのない勝れた方です。金剛の如き智慧を以て、能く衆生一切の罪惡を打ち砕いて下されます。苦が治らぬなどと云う心配は少しもありません」と。

かように話して居る中に虚空の中に何者とも知れず声かして、大王に告げて云うよう「世尊は久しからずして涅槃に入り玉うから、早く仏陀の所に往つてお救いを蒙れ。仏陀の外には助けて下さる方はない、我は今汝を不憫と思うゆえ勧めぬ」と。大王この語を聞いて恐ろしく感じて五体震動して芭蕉樹の如く、震い上つて天に向つて尋ねた「雲の上でそう仰せられるはどなたですか。御姿も見えずお声ばかりでありますか」と申すと「我は汝の父ビンバシヤラじゃ。其方は疾くくギバの言葉に従え、邪見の輩、六臣の勧めについてはならぬ」この父の親切な言葉を聞いてアジャセは、いよゝ心苦しく、氣絶して倒れたが、体中の瘡が一層劇しく痛み、その臭いことは非常である。冷やし薬もきかず、益々ひどくなる計りであった。

この時世尊はギシャクツセンに在しまして、月愛三昧の定に入られ、大光明をお放ちになりました。その光が、如何にも清らかに涼しいのが、遙かにアジャセ王の身体を照らされると、劇しい全身の瘡が一時にスツカリなおつてしまつた。王は「どうしたことか」と云うような光明をお放ち

なさるのであるか」と尋ねられた。ギバが申すには「この光明は恐らく大王の為にわざ／＼お放ちなされたと存じます。大王は前刻、世の中に我病をなおしてくる名医がないとお歎きでありましたが、仏世尊がこの光明で先ず大王のお身体を治療し、そのご平癒の上で、お心の方に及ぼうと思召すのでありましょう」とお答へすると、大王が余程お心が動いて「如来世尊は、この我身に遇うて下さるであらうか」と仰せられたからギバは「如何にも左様であります。世間の親でも多勢の子供を平等に愛するが、其中でも病気で苦しむ子の方に心が重くかゝるようなもので、大王よ世尊もまた左様であります。一切の衆生をひとしく愛されませんが、罪あるものを殊にお案じ下さって、身のおさまりのついでに者よりは、放逸の者を束の間もお忘れになりませぬ。大王よこの瑞相は如来世尊が月愛三昧に入ってお放ちなされるお光であります」。その時「月愛三昧とはどういふことか」かお尋ねされたので、ギバが申すには「譬えば彼の月輪の光は能く一切のウパラ華を見事に開かしめる様に、月愛三昧もまた能く衆生の信心の花を開かしめます。又月が東山に昇ると、旅行者が非常に喜ぶ如く、月愛三昧は、信仰の路を辿る者に、大歡喜を生ぜしめます」と言上した。

実にアジャセ王が、仏力でスツカリ病氣を療して頂いた

ただ念仏して一たのもしき (四)

池山榮吉

歐洲大戦の初期、ドイツ軍が破竹の勢でベルギー領へなだれこんで或る町を占領した。その際の一つの出来事として、フランスのタン新聞に、左の記事が掲載された。

町の人は皆逃げてしまった。あとに残ったものは犬ばかり。その数凡そ百頭、フオックステリヤ、コリー、シエフアード、其他可憐な、小っぽけた愛玩犬など。どれもこれも道端にしゃがんで、二六時中頭を一方に向けて、緊張した、悲しげな顔付で待っている。それは逃げた住民の誰かが、敵に対する恐怖と憎悪とよりも、より強い希望、故郷を訪れて見たい、わが家の様子が知りたいと願って、ときたま戻つて来ることがある。そうした人の影が遠くに見えるると、そのあたりに控えている犬の間に傷ましい動揺が起る。彼等は一斉に耳をたてる、目を大きく見開く、そして鼻を突き出して、頻りににおいを嗅ぐとする。やがてその中の一頭が、急に跳り上って、狂気のようにあら／＼し

と云うことは、徒に聞き流してはならぬ。前に私自身が懺悔した通り、私は煩悶の極、遂に身体に非常な痛みを生じて、終日終夜大惱乱に陥りました。然るに不思議にも僅か二週間のうちに、恰もかき消す様に病氣が本復したのは、決して偶然ではなかった。本復して数日を経て、終に偉大な仏陀の大慈悲の光明に摂取されるに至った。ギバが、如来は大王の身を治療して、心に及ぼす思召であると云われたことは、実に私の境遇をそのまま云われたような心持がする。世の中に甚しい病氣にかかり幸に本復した人も少ないであろう。勿論人生の方面から云えば、医薬が効を奏したとも云われるが、これを靈界の方面より見れば、慈愛の仏陀が、心を救わんとて、先ず肉体から救うて下さったというのを忘れてはならぬ。実にこの月愛三昧の光なるものは、身心を歡喜せしめる慈悲の光明である。

かく仏陀の光明の導きと、ギバの忠告によつて、アジャセ王が、初めて仏を慕いたてまつる心を起した時、仏陀は遙かに此様子をご覧遊ばして、大衆に告げられるには、一切の衆生、無上大道に進む因縁のためには、善き友人に越したものは無い。なぜならアジャセ王がもしギバに従わなかったら、来月の七日に必定命が終つて無間地獄に墮ちる。もうその日がせまっている。だから誰人も早く善知識に従うにしくはないぞと。その大切さをお諭しになった。

く、砲弾やら自動車縦隊やらで、メチャ／＼に毀わされた道路を、一散に飛んで行く。彼は主人を見付けたのだ。主人の側に行き着くと、咽一杯に歡喜の叫びをあげる。ちぎれるように尾を振りちらす、飛びつく、舐める、その身軀はふるえる喜びそのものである。

他の犬達は、しょんぼり我が居場所にうずくまっている。そのうち主人を見付けた犬が、主人と連れ立って、その場を引上げる時がくると、それは他の犬達にとって何たる瞬間であろうぞ。彼等は皆その口先を天に向けて、揃って遠吠えを始める。その腸をえぐるような悲痛な叫は、去り行く人と犬の影が見えなくなるまで続く。見えなくなるとみんな黙って、身じろぎもしなくなる。相も変らず、もと居た所に坐って、じつと待っている。

私はこの記事を初めて読んだ時、深い感動に打たれた。二六時中頭を一方に向けて主人の帰りを待っている犬の心

持を推しはかると、いじらしくて、堪らなかつた。そのうち不図思いついたのが、信仰を求めの人に、この犬のよくな一途の期待があるうなら、という考であつた。彼岸への憧憬の矢、こうした心がまえは、獲信、時節到来の準備として、あつて欲しい、否、なくてはならぬものである。

こうした準備が整うのを相図に、心の中の掃除が仕上がる。虚心担懐という言葉が、文字通りあてはまる情懐が開ける。そこへ例えば、ただ念仏してと聞えてくると、空気が、少しの隙でもあると、のがさず真空をみたすように、この声が、たちまち心一杯にひろがって、浸潤する。

この過程は偶然ではない、必然である、心理的必然である。内に何のこだわりもなく、屈託もないときに、或る意思のこもった声を聞けば、ひとりでに真似たくなる。その意思のままに意思せずに居られたくなる。これは心理の上から争えない事実である。カナリヤが、私一人を呼んでいゝるな、と気付いた時、私はカナリヤの声を意思したのである。聖人が、ただ念仏してと師から承られたとき、口に念仏を称えながら、心に親鸞一人がためなりけりと会得された。すなわちその時、弥陀の五劫思惟の願をよく、意思されたのであつた。

な

もとのまんまという矛盾がありはしないか。油断できないのはこの点である。

雙面神
ヤスス

頭は無神論者、胸はキリスト者」とはシヨウウペンハウアーを評した言葉がある、そこである。明哲シヨウウペンハウアーの如きでさえ、道理の上で神を否定しながら、実践的に道義を説く段になると、キリスト教的旧套から蟬脱しきれなかつたという。それとや、趣を同じうして、頭の中では他力信心、胸の内では自力作善と雙面神ヤススの頭のよくな自家撞着に気付かず居ることはないか。私自身満更覚がないではない、時々臨機にしらべてみる必要がある。

念仏は余計なものとして作られたものではない。なくてはならないものである、と同時に、他の何物をもつても代えることの出来ないもの、従つて単独行動は念仏本来の性分、念仏と外のものとの共働を策するのは、この絶対性への反逆であり、冒瀆である。念仏はただ惜しみなく奪うものの上のみ、あまねくその全分を光被する。其の一、其の二の念仏が、とかく坐りが悪るかつたのに、其の三に至つて、にわかにはびつたりおさまりがつくというのも、つまりこのゆえである。

天王寺の門前で、法然上人が多勢の重病に悩む人々に粥

こう考えると、この意思というのは、つまり弥陀の五劫思惟の願であり、よき人の仰せであり、念仏である。念仏の掛声に對して、念仏の掛声を以て応える。その掛合、その隙のない実践躬行が、今までに覚えのない響を、念仏に聴きとるといふものである。丁度山路に踏み迷つた人が、救いに来た人々のオーイ、と呼ぶ声を聞きつけて、自分もオーイと応えるように、念仏は、念仏する人からみれば、うけこたえをするまでのものと、わかつたところが転化の其三、信仰の現世における大詰の段落である。

金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ
弥陀の心光撰護して、ながく生死をへだてける。
まちもまたれもせぬ青い芒の曠野ではない、どちらが犬で、どちらが主人か知らないが、まちつまたれつしたもの同志、手に手を取り合つた言亡絶慮の光景である。

ここまでくればもうお目出度うと、同慶の念仏を合唱してもいいのだが、念には念をいれる老婆心から、なお一言注意しておきたいことがある。今こそ私は、すっかり念仏を手に入れることが出来た。従来とは受入れ方がガラリ違ふ。呼ぶ念仏に應える念仏、念仏の機能がすっかり呑みこめた、とわかつたような積りでいても、それは心の上層だけに認められる変革で、中層の下部から下層にかけては、

をわけて食べさせている。これは夢である。高野の明遍僧都の夢である。僧都はこれによつて、自分がかねてから法然上人の選択集について抱いていた見解、チト行き過ぎではあるまいか、という見解のあやまりを痛感したのである。念仏は粥である。罪惡深重煩惱熾盛と名のつく、いかなる名医も匙を投げる難病にかかつた者のために、特に工夫され、調理された粥である。米肉菜菓等、普通の食料では消化できず、そこから栄養をとるわけに行かないほど、胃腸の弱り果ててる病人目当の粥なのである。この粥はその病人にとつて、絶対唯一無二の必需品であつて、それ以外に栄養をとる方法は絶無なのである。

前に述べた其の一、其の二の見方、念仏もすてたものでない、念仏も結構役に立つ、念仏は他の何物にも劣らない、念仏にかぎる、などというのは、まだ自分の病症を十分に自覚せずにいる病人自身の、自見の覚悟である。

粥でもいいではない。粥でもいいと云うのは、粥を他の栄養品の下位に置くのである。粥もいいでもない。粥もいいとは、粥を他の栄養品と同位に置くのである。粥がいいとは、粥を他の栄養品に上位に置くが、他の栄養品に對して、比較的優位を認めるに過ぎない。粥にかぎると、極言するところまで行つたとしても、若しそれが、相対的最優位の認定にとどまるならば、矢張り駄目である。

粥でなくてはいけないのである。念仏でなくてはいけないのである。ただ念仏でなくてはいけないのである。異物の混淆をゆるさないのである。念仏の一人働きにうちまかさなくてはいけないのである。今までいろ／＼思い迷っていたが、今という今、すっかり了らしていただけた、ホーンにそうであったわいと、念仏の粥をいただいたところが、惜みなく奪ったかたちである。

こないだ或人が私にむかつて、自分の信仰所感を語りつた化巻つあったとき、ありがとうございます、勿体ないと思ひます」と云った。その勿体ないと云う言葉に、なんだかへだてるような、こぼむような気味を感じたので——尤もこれは今に始つたことではない。これまでにも勿体ないという言葉をきくと、どうかすると一種の耳障りを覚えたことがあつたが、今もその感に襲われたので、あなたの勿体ないとおっしゃるのは、どういう意味でおっしゃるのですか。もしそれが、うなぎ／＼膝をのり出して、身に余る感謝の意を表す、一種の感投詞的な言葉だとすると、まことに結構なのですが、もしその反対に、さえぎるように手を前に突出して、いざりながらあとしざりする、ノーサンキューの意味を含むとすると、どうも感心出来ませんが、と注意したことであつた。

香月院語録

向うからのお持ち掛け

後生たすけたまへと願うと云えばとて、こちらから持ち掛けて願うことではない。諸仏には我々をたすけようとの本願が無いによつて、こちらより持ち掛けて願うたれども、弥陀仏には、たすけるに間違いない程にと、向うから持ち掛けて下さる。しかればこちらより持ち掛け願うにはあら

仏になるべき相

「眞実信心、必具名号」で、喜びのあまりに、名号となえらるるのが、いよ／＼信を獲て、仏になるべき相のあらわれたところなり。お言葉に、「南無阿弥陀仏をとなくれば、南無阿弥陀仏に生れこそすれ」と。仏になるに間違いないと決定して、南無阿弥陀仏をあけくれ称えるのは、南無阿弥陀仏になるべきすがたなり。

弥陀の御約束

弥陀因位の本願力のことを、御約束と云う。弥陀の御約

六六

自からを施したさ一杯で、さし延べられる手を待ちかねる念仏に對して遠慮は無沙汰である。どちらにどころんでも、ヒヨッコり起上る不倒翁は、腹の中に鉛の錘を持っているからである。惜しみなく奪い取つた念仏こそは、その鉛の錘である。これさえあれば、その過不及を均齊する性質によつて、いついかなる場合にも、信仰はピッタリと据つてゆるがない。金剛不壞の信心はかくて確立する。念仏がその全機能を發揮する可能はかくて完成する。

(続)



東のようは、因位の本願に、かくなさずはおくまじ、是れに間違はないほどにと、御約束なされたなり。今日の衆生に對して、堅い約束をなされたが、弥陀因位の第十八願なり。我名を称えんものを迎えんとある、第十八願の約束ほど堅い約束はなきなり。

悪もおそれなし

曾無一善の我等は、罪に目がつき恐れて、本願の不思議が疑わしくてならぬ。

それ故に、悪に目をかけて、悪が多ければ、かかるものをおたすけと、なお／＼丈夫に思えとの御示しにあずかりて、さてはかかるものを御助けの本願じゃと思えば、喜びがおこることなり、喜びが起れば、今迄の疑いもなくなるなり。

罪福信が邪魔になる

自力の行者は、罪を造れば未来悪趣へ落ちて苦を受ける、又善根を修すれば未来善趣へ生れて樂果をうけると云うこ

恭教修善修王閣修長修

とを信じて居る故、他力不思議が、どうも疑わしゆうて信
が得られぬ。
善悪因果の道理を信ずるは、通仏法の信心で、因果撥無
の外道とは違つて結構な信じやが、今他力不思議を信ずる
時は、この罪福信が大いに邪魔になる。なぜなれば、一生
造悪の凡夫が、善根を修せず徳もなしに、願力の不思議で、
無漏の浄土へ往生すると云うことは、通仏法の道理にはと
んと無きことじやによりて、罪福信するところを押し立て
て居る間は、どうも疑わしくてならぬによつて信は得られ
ぬなり。

元祖と吾祖

眞実の信心を獲たものは、称名の称えられぬはずはない、
信には必ず名号を具する程に、寝てもさめてもへだてなく、
南無阿弥陀仏を称えよと、勧めたまうが吾祖。
元祖はまた、念仏為本と勧められながら、念仏の行者に
は必ず三心(至誠心、深心、廻向発願心)を具すべしと云
われている。

吾祖は、信心為本と勧められながら、眞実信心には必ず
名号を具すべし、とのたまう。元祖は、必ず信心を具す。
吾祖は必ず名号を具す。両方ながら、必は必然自然の義で、
元祖は自然と三心は具す、と仰せられ、吾祖は自ら名号は
称えられるとのたまう。

無相法語

(一)

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

私が手紙や、ハガキの後先きに、お念仏、四声よく書く
のは、私一息に、四声申すらしいのです。又実によくお念
仏を忘れるので、自戒のためであります。先徳の仰せに

「念仏のみぞまことにておはします」 「念仏の外はみな
魔事なりと心得たし」

とあり、このお言葉が思い浮ぶと、長々と書いたモノ、
皆モテ、ソラゴト、タワゴト、みな魔事なりと、思われる
ことであります。しかし凡夫同志はソラゴトであつても、
書かねば、お念仏だけではナカナカ通じませんのでいたし
方ないのでクドク書きますが、オタガイに、肝要は、ア
トサキの「ナムアミダブツ」だけということを忘れぬよう
にしなければならぬと思ひます。往生極楽の道も、念仏

その御勧めぶりは違えども、御意は一致なり。元祖は、
「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申す外に別の子
細なし」と仰せられて、念仏為本の勧めになりて、信心は
陰になる故に、「但し三心四修と申すことの候は、決定し
て南無阿弥陀仏にて往生するぞと、おもふうちにこもり候
と、信を陰にしたまう。吾祖は「念仏して弥陀に助けら
れまいらすべしと、信ずるほかに別の子細なきなり」と、
称えてから往生定まるではない。称えるものを御たすげぞ
と信ずるほかに別の子細なしとなり。それをその通り信じた
れば、必具の名号は称えらるることは知れたこと故、名号
を陰にして、信ずるほかに別の子細なきなりとの御勧めぶ
りなり。両祖の御意の厘毫もたがわぬ処、これを師資相承
と申すなり。

仏法にあだは無きなり

昨日までは一日々々残らず日をたてて、今日まで生きな
がらえたれども、出る息は入るをまたぬならいなければ、唯
今いのち終るかも知れぬなり。

仏法の上からは、何ごともあすと云うことは無いはずな
り。唯今いのち終ると思つて見れば、今日の日は丸ながら
にあると思えぬなり。しかれば仏法のことを申するならば、
明日のことを取りこして今日するように急ぎ致すべきなり。

岩崎成章

川崎市

だけであつて、念仏について、アアタ、コウダという学理
や法文ではありますまいから。

又先徳の仰せに「地獄覚悟で聞く気はなくとも、どうで
もかうでも、我が浄土へ生れさせずばと思召す如来の大悲
なれば、一日に八億四千も心がうつりかはり、悪のみ造る
身なれども、弥陀の名号は利剣ゆえ切り給ふ」とあります
が「弥陀の名号は利剣ゆえ切りたもふ」とは、ワレ／＼の
一日の八億四千のココロのうつりかわりの一切が、煩惱、妄
念であり、ソラゴト、タワゴトであることを、弥陀の名号
は大悲ゆえ、ソウチリホドのこともお見のがしなく、愚悪
のワレラに、知らしめたまうと云うことでありましようか、
手紙、ハガキのアトサキに四声づついただいたお念仏様は、
大悲のお光明、ご信心様であるゆえ、手紙のアトサキのお
念仏さまのホカは、皆ソラゴト、タワゴトにすぎぬことを
書いたアト知らせて下さるのでありましよう。手紙の中味
だけでなく、毎日々々の一切が、ソラゴト、タワゴトを出

ぬ私なのでありましょう。その一切を、内外の一切を転悪成善せしむるものは、ただく如来大悲の結晶のお念仏様でございましょう。

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

(二)

「本願相應」

歎異抄「第十一条」の「本願に相應して、眞実報土に往生するなり」又「第十二条」に「たまくナニゴコロもなく、本願に相應して念仏申す人をも」とあるが、本願に相應しての報土往生も、本願に相應して念仏申す、ということも、凡夫のワレワレのハカライで「本願相應」といったような、カッコのよいことが出来るとは、とてもく考えられません。それで、ただ念仏してミダに助けられまいらすべしと、よき人の仰せをかぶりて、信じ、称えるまんまが、オノズカラ、他力自然に、「本願相應」ということになるということでは、とてもくワレく凡愚が、自分の力やハカライや考えで「本願相應」といったようなカッコよいことが出来ようはずがありません。ただ「よき

ありがたくいただくばかりでありましょう。

なんとしてもワレくのような、全く無仏法者が、ワレとして、そんなことが、考えられましょう。仏法のこと、ナニゴトもくただく如来のオンハカライに依るほかないこととでございましょう。

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

念仏詩抄 (一)

名にこめし

名にこめし

おやの大悲の

おんこころ

ナムアマミダブツと

木林無碍法王

人」の仰せのままに、凡夫はソレゾレの業、煩惱のアリノマンマでただ念仏申すということ、ただその一つにオノズカラ、本願を信じ、タノミ、本願にマカセ、本願に相應するということだが、凡夫の知らぬまま、凡夫のハカライはないまま、ただ仰せのままに、念仏申すという、ただ念仏申すというたった一つのコトにおいて、オノズカラ、信ということも、相應ということも成ぜられているのであろうといただくホカないのであります。ナニ一つ自分て出来るような人間ではありません。お念仏また、どんなお念

仏も、「ひとへにミダの御もよほし」でなくては一声のお念仏も申せぬような、まったくの「無仏法」「ナントモナイ」身でありますゆえ——「本願に相應して、報土往生をとげられる」ということも「本願相應の念仏」ということも、自分で「そうなる」「本願相應の念仏になつてゐる」このような「念仏していれば、眞実報土に往生出来る」など、考えられるものでありません。それは、ただ如来の仰せ、御ハカライ、よき人のありがたき仰せとしてのみ、ありがたくいただくお言葉であります。ワレとして、これで本願に相應している、これで本願に相應して、お浄土にまいれる、これで本願相應の念仏申しているなどと、大ソレタコト、考えられようがありません。ただそうなつてゐる、ただそうして下さるといふオココロを、仰せを、

いただくばかり

念仏詩抄 (二)

幼児が
カタコトで
ハナシして

わたしの
カタコト
念仏詩抄

カタコト
あんじん
書くのです



念仏者 木村無相先生

鹿児島県鹿島

土井 紀 明

今から十五年前、私が東本願寺の同朋会館に勤めることになったのがきっかけで、当時会館の門衛をしておられた木村先生と出会いました。それから一月に亡くなられるまで、筆舌に尽しがたい懇切丁寧なご教示を頂きました。先生の思い出は沢山ありますが、その中、先生の「お念仏」について感じておりますことを少し書かせて頂きます。

先生が常に仰せられた「ただ念仏」「ただ念仏の仰せ」とは一体どんな思召しであったかというのを反芻させられることでありますが、真宗教学の歴史からみると、第十八の念仏往生の願（大経）が、観経の下々品の機の上に於て、悪人救済の法として実現して行く場面のところで、極悪底下の凡夫が命終の時に臨んで善知識より「汝もし念ずること能はずばまさに無量寿仏を称ふべし」とすすめ、その仰せに順つて「十念を具足して南無阿弥陀仏」と申して、浄土往生を遂げたという、あの教説が先生の常に引用されていたところで、「汝もし念ずること能はずば」とは、

すべしとよき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の子細なきなり」という聖人のご信心の極みとして表白せられたのでありまじょう。

木村先生は、歎異抄第二章のこの聖人のお言葉に深く傾倒されました。「聖人こそ私の唯一の善知識であり、この第二章のお言葉が私の究極のよりどころの一句である」と常に申されました。事実、先生はこの一句に文字通り全生命をかけられ、この一句を本当に頂き尽くすことに始終されたと云ってよいと思います。この「ただ念仏して云々」は同じ第二章の最後より窺えば、弥陀―釈迦―善導―法然―親鸞と伝持された念仏往生の核心であり、善知識相承の仏語でありまじょう。この御言葉一筋に生きられた先生の「ただ念仏」はこの浄土教の基本と核心に極めて忠実に順がわれたものであり、先生は浄土教の本流に全身を浴しておられたと思います。

さて「ただ念仏」のタダとは、念仏一つということであるとともに、タダとは己れの心の内容に一切関係のない、どんな心が起ろうと、その心のまんまということ、ただ念仏とは、ただ口にナムアマミダブツと称えること、発音すること、それを先生は「オーム念仏」（オームが口真似して鳴くような「発音念仏である」といっていただいております。

助かろうとして為す一切の凡夫の意業とか思いに属する一切のこと、所謂「煩惱を断ずる」「悟りを開く」ということは勿論、「本願を信ぜよ」「疑いを晴らせ」「自己を自覚せよ」「絶対の現実に目覚めよ」と教えられてその通りになろうとする等、自分に要求される一切の事柄に対して、不可能の壁にぶつかった者が「念ずること能はざる者」であり、――この場合の念という一文字に凡夫の心のあり様の全体が収まる――その者に「まさに無量寿仏（名）を称すべし」との仰せがかかり、その仰せのままに念仏申すところに、浄土往生の道が開かれていたのであります。ここから善導大師は、大経第十八願を、「もし我、仏と成らんば我が名号を称すること下十声に至るまでもし生まれば正覚を取らじ」と釈して、第十八願を「称名の本願」として明らかにして下さり、これが法然上人に受け伝えられて選択本願（念仏）と讃えられ、親鸞聖人に相承（真影 附属の銘文等）され「ただ念仏して弥陀に助けられまいら

次に「ただ念仏して……信ずる外に別の子細なきなり」の「信ずる」という点についてですが、少くともこの仰せを本當に我が身に頂こうとするならば、この「信ずる」という点にぶつからざるを得ないと思います。先生はこの処で、長い間御苦労されたのではないかと思います。その結果、「信ずる」の真意を得られて、晩年は純一無雜にただ念仏一つというところに帰結されました。その箇所をお手紙の中には、「よき人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」とは、よき人の仰せのままに、「称える」より外に別の子細なきなりである、と気づかされたことはまことに幸せなことである。正面から信じようとしたがダメであった。正面から弥陀をたのもうとしたがダメであった。信ずるも落第、たのむも落第、まかせるも落第、その一切落第の身が「信ずる」ということは仰せのままに「称える」ことであつた。ただ念仏する身にならしめられてみると、なんとまあ「称える」ことは「信ずる」ということになつていたのであつた。よき人の仰せのままに「ただ念仏申す」ということが信ずるということになつていたのであつた。これは実に不思議な助け方であります。我としては絶対不可能なことが、ただよき人の仰せのまんま、ただ念仏ということにおいて、はからずも成就せられているのでした」と、了解しておられます。

そして、いよいよ最晩年、お身体が弱られてからは、苦しんでお念仏も申し辛くなられましたが、そうなるから「仰せ一つ、称えよ」とよく仰言っておられました。先生において「ただ称えよ」の仰せだけということは、称えるときか称えないとかいう凡夫の側の所作を超えて、私の全分を丸々引き受けて下さる大慈大悲の親心そのものを、ただほればれと仰いでいることの外になかったし、それで充分であったのではなからうか。聖人の「一念多念文意」の中に、「本願の文（注・第十八願文）に乃至十念と誓いたまへり——この誓願はすなはち易往易行のみちをあらはし大慈大悲のきはまりなきことをしめしたまふなり」としるされてる如く、先生は「ただ称えよ（乃至十念）」の御言葉に大慈大悲のやるせないみこころの極りを感佩しておられたのであらうと思ひます。

又先生は「昭和五十六年の夏頃、私は我愛の固まりであるという極悪の自性が知らされた。今まで極重悪人と書きもし、口にも言うてきたが、悪人とは感じられたが極重悪人とまでは感じられなかった。その夏以来、いよいよ極重悪人と知らされ、計らずもそこに、「唯称仏」のお言葉がびつたりはまって、極重悪人唯称仏のお言葉通りしつくりとただける」との意を語られました。正信偈のこの一句は

するから苦しむの。信者になれんまんまで上等なの。それが最高じや。今から求めて聞いて信者にならうと一生懸命になる。信者にならうと思わんまんまで、もうそのまんまで、なれんまんまでええの。本当に、気休めでない。ごく普通の平凡な人として終ればええの。……六十年の聞法求道の結果は、お念仏一つ。それも、ただ念仏せよの仰せ一つ。病院にいと有難いことに凡夫の方には何もないんじやということが思い知らされる。苦しければ苦しいまんま念仏だに申さず終らせてもろうても、それで充分。極楽があらうが無からうが、参らせて下さらうが下さるまいが、それは如来様のお仕事や。わしの仕事と違う。お聞かせをいただくだけのこと」

と、臨終さしせまったなかで、わが計らいで聞こうとしても聞くことのできぬお言葉を賜ったのであります。

この時ばかりでなく平生から、こうした信者ぶらない正直な、ありのままの告白を通してのご教示により、私自身「なろう／＼」として計らい苦しんでいた間違いを知らされたのであります。

又、昨年の秋には、「お念仏のおん催しのあるたびに文句なく、「ヤレうれしや」「ヤレ有難や」と続いて称名念仏いただいでいることです。歎異抄の第九章を拝読申しまして、念仏申し候へども踊躍歡喜のころおろそかに

全ての真宗人にとって感銘の深い個所ではあるが、それを本当に言葉通りに体感している人は稀ではなからうか。先生の「お念仏によって開かれた世界の深さを讃仰せずには居られないのであります。唯称仏」の大悲は極重悪人の機の上に躍動している如く、先生の「ただ念仏」は、先生の徹底した自性の自覚と表裏一体となっていたと思ひます。御自分を我愛の固まり、謗法闡提（無信）無仏法の機であると見極め、その自性を一步も動かさず正直にさらけ出して私共に語って下さいました。亡くなられる前（正月三日）にお会いした時も、大変苦しい息の中から遺言のように言われました。（以下テープから）

「凡夫に属することは何もいらんの。普通の無仏法、無信仰の人と同じでええの。少しも真宗的らしい気持にならうとすること、色気や、そんなものは……。信心の得益というのは、何か信心いただいたら特別なことがあるように思ひけれど、その錯覚を取り除いて下さって、信心いただいてもいただかなくても、全く素人と同じじやということも明瞭にさせて下さるの。じやから普段の生活に迷いがない。これが人間であり、これが人生であるということ。を明瞭にさせてもらえる……。信者ぶらんでそのまま死なしてもらえないのじや。信者ぶらんそのまま生きさせてもらえるのじや。それが信心の得益じや……。信者にならうと

候ふこと」の方が心がとまっておりましたが、お念仏は本来「天におどり地におどるほどに喜ぶべき」実に大無辺な如来大悲の恩徳の結晶でありました」とのお便りを頂きました。ここにも素晴らしい念仏讃仰の世界を思い知らされます。

最後に弥陀釈迦二尊によって開かれた選択本願、念仏往生の道を本当に素直に一筋に歩まれた「念仏者木村無相先生」のご生涯は、今日浄土真宗が色々説かれ、それ故にまた、惑うことの多い私共に、親鸞聖人の御教えに心を虚しくして聞くことの大切さを教えて下さり、またお念仏の尊さを証して下さったご一生であったと思ひます。先生のご厚恩を感謝しつ、筆を置きます。

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

ひとこえ ひとこえ 如来のおでまし

ひとこえ ひとこえ 浄土真宗

木村 無相



法喜その折りく

憐愍善悪凡人

これは法然上人の教を随喜せられた親鸞聖人の報恩の言葉であるが、瞑目して誦しまつる時、異状な驚きをおぼえるのである。

幼い頃から悪い事をするな、善い事をせよといつも教えられてきたが、青年になると、本当の善とは何か、それは時と所によつて変るし、若い時の判断も年齢と共に怪しくなるにつけて、大きな疑惑に陥つた。

そこで極く普通な相対的な善悪の範囲で自分を処するようになつた。然しまた困つた事には、何かすこし善い事すると我よしとなつて他を批判し、それに報酬を求め、相手が認めてくれぬと不平不満になり、反対に善くなれぬにつけては卑屈になりひがみもおこる。

近角常観師は、善煩惱は金の鎖、悪煩惱は鉄の鎖で、どちらも身を縛ると云われたが全くその通りである。

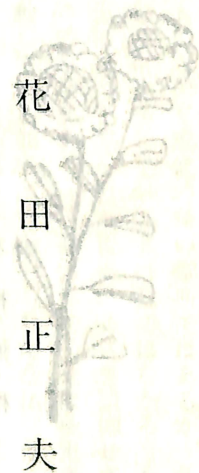
心ひるがへつてくらし」と朝に夕べに悲歎され、奈良や叡山の徳、碩学をたずねられたけれど、答うるに人なしであつた。幸に宿縁とみにあらわれ、善導大師の観経疏をひもとかれて「末代造悪の凡夫の生死を出離する旨」を見出され随喜身にあまり身の毛もよだつたと述べていられる。

更に仏の御在世中についた王舎城の悲劇の張本人の阿闍世王が、殺父の罪の重さに気づき、大苦悶に陥ちた時、著婆大臣に勧められて、おそる／＼釈尊の御前に進み出た時、大悲あふるる仏が、大王よと呼びかけられたが、わが身の罪の大きさにためらうていると、阿闍世大王よと重ねて呼びかけられたので心ひらけて「仏心平等にしてさらにへだてなきを知れり」相対差別心しか持ち合わせていない身に、絶対平等の大悲心に浴し、やがて無根の信を得たり、と感涙にむせんでいる。

嗚呼、はてしなく善悪、是非に苦しむ身を仏はよく知らしめされて、お隔てなく救い逃げて下さることを、よき先達、よき師に教えられて、その広大なまことを信する力もない身も疑えなくさせて下さるのであつた。

信心に就いて

世間に、鰯の頭も信心から、というように、どんな宗教



花田正夫

ここにそれらの苦の起る本である煩惱を滅せねばならぬが、盤珪禪師の言葉に「血で汚れたものを血で洗うとまた血で汚れる」とあるが、宗教改革者のルーテルも「洗えば洗うほど汚れる手」と歎いている。まして小人凡夫の私にはもとより不可能である。

このように善悪を知る眼もなく、何かやると善悪の鎖に縛られて身動きもならぬ私に親鸞聖人は「善悪の二つ総じてもて存知せざるなり」ともまた「いづれの行もおよびがたき身」と同座して下さり、そこに「然るに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごときの我等がためなりけり」と、本願のたのもしさを指差して下さつた御蔭で、私の魂のふるさとが知らされた。

さて法然上人は修学修行を重ねて四十三になられた時、「經典を披覽するにその智最愚なり、行法を修習するに其

も信心が中心になつている。そうした信心には強弱濃淡と種々なものがあるが、自分の力をもととした信心は、有為転変するし、ことに無常の嵐の前には吹き消されて了。

さて親鸞聖人は、特に大信心を勧められて、私共の持ち合せの相対的な知慧や経験にもとづく信心ではなく、先死に障えられぬ仏心にはぐくまれて、点滴が岩をも穿つように、頑迷な私共の身に徹して、疑えなくなつた信心、換言すれば、仏からあたえられた大信心を讃仰されている。

然し、ひとえに仏力によると聞かされても、自分に仏心を知る力も、したがって信することも出来ない身に気付かない間は、ひとごと聞き流すばかりである。親は子に無くてはならぬことのために昼夜に辛苦するように、仏は私共に知る力も信することも出来ないことをかねて見抜かれて、そうした身を必ず救わずばやまないと、徹塵のためらいも疑いも持たれず大悲の御手をさしのべて下さるのである。

私がかつて「信ぜよされば救われん」という聖書を読み、信じよう、疑うまいと種々苦心したけれど、英雄にして英雄を知るように、神のまことも、自分にまことの無い身には、どうしても信することが出来ないことに行き詰り、どんなに美しい緑の島があつても、罪の潮から離れては生かれない人魚の身を歎くばかりであつた。

この時、幸によき人々に勧められて歎異抄を読み、親鸞聖人に心ひかれ、教行信証をひもとくと「無始よりこのかた一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂無く、法爾として真実の信樂なし」と、無信の身を知悉して下さり、ここをもって「如来、苦惱の群生海を悲憐して、無碍広大の淨心をもって、諸有海に廻施したまへり」と、一切のよき教えからも逸脱する身に、此処までおいででなく、信ずる力さえもない身になりきって下さって、永い間迷ひ抜いた闇黒の身に光がさしそめたのである。

国木田独歩の病床録に「我生の孤独と荒涼と不安に堪えず、何物か神秘の力に頼らんと欲する情極めて切なり。この生死の境に迷える余は、かねてより信頼せし植村正久氏の慰問をうけ、氏は「ただ禱れ」という。しかれども余は禱ること能はず。禱りの言葉は極めて簡易なれども、禱りのころは難し。誰か来りてこの禱り得ぬ心を救わずや。余は衷心より禱りを捧ぐるを得ば、その時直に救われ得べきと信ず。五月十九日午後、独歩氏病床に泣く」とあるが、かつてO大学の学長だったT先生から「自分は賀川豊彦牧師に導かれて四十年、その間聖書を読みつづけて来たが、真実の禱りが出来ぬことに行き詰っていた。幸に親鸞聖人の教えによって、この禱り得ぬ者を救うて下さるお念仏のい

ここに良寛師はどうしてこれがすらくと申されたのであろうか？と考えさせられた。池山榮吉先生の歌に、

たのまるるただ念仏の我にあり さるべき業はさもあらばあれ

とある。還暦を迎えられた先生が、身辺に障りの多い中にあつて、歎異抄の七章の「念仏者は無碍の一道なり」の全文を身を以て読めるようになったと仰言つて、この歌を示されたのである。これは未来の障りに向つての味いで、過去をかえりみては、

惨怛たる悔いの残せし一一の 跡かたもなき無碍の一道、

と讀えられた。「五十過ぎるとよく眠れない夜がある、そうした時、思い出されるのは過去に遭つた人々のことであるが、その多くは後悔させられることばかりである。そのどうしてみようとない惨怛とした中にお念仏が浮かぶと、それらが綺麗に洗われて、満ち潮に洗われた海辺のような清々しい恵みをいただける」と念仏裡に語られた。

そこに、たのみの力になって下さるお念仏によって、逃げず、争わず、そのまま我関せずと受けて越える道を讀えられたのであつた。「業道に随順して業道を越える」無碍の妙味である。

御和讃に

われを知らされ、永年とけなかつた心の氷が溶かされた」と感銘の深い書信をいただいたことがある。

嗚呼、弥陀仏の廻向の大信心かな！これこそ無明長夜の大燈炬であり、生死大海の大船筏である。求道のはじめは自分の力をたのんで何とかなれると思つていたが、仏の光明に照らされて、邪見憍慢の悪衆生、邪見無信の身とは自分の事であつたと慚愧され、この救いの道の絶えてない身にそそがれる大悲を謝しまつるばかりである。

○ 災難に逢ふ時は災難に逢ふがよく候、死ぬる時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候。

良寛師七十一の十一月に越後三条の地震におつた時の手紙である。ゲートは不幸に向つて「待つて候」と受けているが、力の宗教を提唱したニイチエは「望むところ」と云つて候。徒らに取り越し苦勞をして二重三重の苦をせず、待つて候、望むところと受けることが出来れば、それだけ軽く越えられるに違ひない。然しそれも重い苦となるとさううまくはやれない。我が国でも「憂きことのないこの上に積れかし、限りある身の力ためさん」とある。いかに元氣のよい歌であるが、力に限りのある身とて、必ず崩れる。

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしと悲しむな

生死大海の船筏なり 罪障重しと歎かざれ

罪障功德の体となる 水と水の如くにて

水多きに水おほし さはりおほきに徳おほし

無碍光の利益より 威徳広大の信をえて

かならず煩惱の氷とけ すなはち菩提の水となる

と、聖人は讃仰していられる。

×××× ×××× ××××

おりにふれて 故・北岡行男

埋火を搔けば憶念よみがえり

鉄塊の温められし炭火かな

冬灯下 遠き縁を慶びて

冬籠り 悪性さらに止むべしや

あとがき

何時しか霜月となり、燈火の用意かしこし秋の暮、を思い浮かべ、読書の好季をたのしみおります。

さて本月号には、近角先生の懺悔録から阿闍世王の記録を頂きました。釈尊が「阿闍世の為に涅槃に入らず」とまで仰言ったことも有難いことであります。己が罪の重さに大煩悶におちた時、六師の慰問は何の力にならず、仏弟子ギバ大臣に導かれる点も、深く省みさせられます。

池山先生の最後の講話、弥陀仏の大願業力に引接せられて、念仏往生させて頂ける消息、哀々切々とひびいてまいりますことです。

香月院師の語録はいつも座右に掲げて教えられておりますもので、抄出させていただきました。滋賀県の源通寺老院が、「宿業でたとえぼけても狂うてもたがえたまわぬ弥陀の約束」と、渴仰して居られますことも思い併せられました。こちらが間違わぬ身になるので

なく、間違いのない御誓いこそ頼もしい限りであります。

岩崎成章師は、木村無相師の晩年に親炙されて、一器から一器にうつすように法水をいただかれました。お住居の川崎市から福井の武生市まで毎月航空便で訪問聞法せられたことにもいつも襟を正さしめられます。

鹿兒島県の土井紀明様は、同朋会館で木村師にめぐり会い、爾來臨末の日まで、「ただ念仏」の妙味を聞きとられました。その聞法のたどりを略述して下さいました。これは、無相師の百ヶ日記念に出版された「相念」に掲げられたものであります。

なお、井上先生と西元先生は、特にお忙しくて、次の月にお原稿をいただくことになりました。御病気ではありません。

最近、私自身が親鸞聖人に導かれました懺悔録をメモしており、とくにおへだてのない大悲の聲に驚いたこと、そしてそこにこそ私の魂のふるさとのあることを知らされたことを随喜しております。いずれ慈光誌に掲げさせていただきます。

十一月十八日の例会は大抵開かせていただきます。一期一会の思いや切であります。御参会をお待ち申し上げます。

明日ありと知る由もなき我なれば今日の一日を生き抜かんとおもふ

高原憲氏詠

定価 半年 八〇〇円(送共)
一年 一六〇〇円(送共)

編集・発行人 花田正夫
名古屋市南区駐上一丁目十四―二千九

電話 八二一局 七〇三七番

印刷人 坂部光雄
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

名古屋市南区駐上一丁目十四―二千九

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 六一〇四七〇番
郵便番号 四五七